メイエとドラゴンの剣

豆腐屋のナウい息子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
メイエとドラゴンの剣

【Ｎコード】
Ｎ３９４５ＢＡ

【作者名】
豆腐屋のナウい息子

【あらすじ】
騎士メイエは女である。仲間達に無用な気遣いをさせまいと、女であることを隠して今や騎士団の副長となった。
神を信じ、仲間を信じ、その仲間を守るため、彼女はまた剣を取る。

1

もうすぐ出発の時間だろう。
この洒落た部屋とも暫しのお別れだ。
私は騎士なのだから自分のことは自分でやると言ったのだが父がそれを許さず、メイドを押し付けてきた。
服はこれが似合うだの、髪留めはこれが良いだの、とてもうるさいメイドだ。
でも、とても助かっている。

「お嬢様、もうすぐご出立の時間です」

「ああ、わかっている。私は騎士なのだから、……お嬢様と言うのはやめてくれないか」

つい最近、いまだ顔も見たこともない聖女様より騎士団の副長を任されたばかりなのだ。

「お嬢様はグラシアン家のお嬢様です。この屋敷はグラシアン領も同じこと、お嬢様とお呼びして何か粗相がございましょうか」

「部下達は私を騎士として見ているのだ。変に女として意識させたくない」

「……では、この屋敷内でのみお嬢様とお呼びさせていただきます」

どうしても私をお嬢様と呼びたいようだ。この無愛想な表情を崩さないメイドはアラーナと言う。私よりも少し背が低めで、私が気付かない間にいろいろと気を利かせてくれる素晴らしいメイドだ。たぶん私よりも年上だろう彼女は年齢を問うても答えてくれない。

「今後の予定をもう一度頼む」

「はい。これより出立後、ランマール高原で第１４、１５師団と合流。合流後は師団長との会食が予定されています」

「人の身体をジロジロと眺めるジジイ共と食べるのか」

「ジジイ共ではありません。師団長です」

「ああ、わかっている。どうして私がこのような……」

「少数精鋭全戦無敗のロードル騎士団といえば、この国の兵士達は皆知っているはず。その騎士団の副長であるお嬢様が激励ともなれば、兵士達の士気はどんな敵をも粉砕するでしょう」

「こう言うのは王子殿下の仕事だろうに」

「王子殿下はご公務が詰まっているそうで、お嬢様にこの話が来た

わけです」

「ご公務ねぇ……どうせまたくだらない遊びでも思いついたんだろう」

「お嬢様、いくら神の命より集まった騎士団の副長とは言え、国の王子殿下に向かいそのような」

「あーわかったわかった。きちんと友を敬い、愛すことを誓いますー」

鎧を着て、準備も終えたところで王都の正門に行ってみると異様な人だかりが出来ていた。
私が着ている鎧とは違う色だが、我が騎士団の鎧と一目でわかった。
今日私以外に王都を発つ者はいないはずだが……まさか……

「あ！副長だ！副長がお見えになったぞ！」

「副長！お気をつけて！」

あーうるさいうるさい、何も見えない。基本的に騎士達は私より大きいから、囲まれると前も後ろ見えなくなるのだ。

「今回の任務を何故お断りされなかったのですか」

やっと図体だけは一流な騎士達が道を開けてくれたかと思ったら、またも図体のでかい騎士に行く手を阻まれた。

「王子殿下から渡って来た話だ。断るわけにもいくまい」

「しかしながら、それでは副長が女性と言うことがバレてしまいます」

耳元で小さく、そしてゆったりと話し、私の行く手を阻む彼は名をルーシュと言う。この騎士団の宰相的人物であり、最年長でもある。

「王子が司令部でバラしてしまったのだ。どうせあっという間に国王軍全体に広まる」

「部下達に知られてもいいのですか」

「時期を見て話すつもりだったことがただ早まるだけのこと。それに身辺の部下には教えている」

「……」

「わかっている。我が神に背くようなことはしない。俗の仕事はこれが最後だ。私達が王子殿下によくしていただいているのは知っているだろう」

ルーシュは特に何も言う気はないようだ。ルーシュの言わんとすることはわかる。我々は神の剣であるのだ。

俗に染まっていいことなど、ないのだ。

豪華な馬車に私と護衛2人だけ。計6人の護衛はその誰もが聖女より神託を得て騎士となった者達だ。
護衛などいらんと言ったのにそれが任務であるかのように勝手について来た。馬車に乗っている騎士に聞いてみると事実、任務である。

「副長は何故騎士になられたのですか？」

この者達には私が女であることは伝えていない。この後すぐにバレるのだから、教えてもいいだろう。
私が女であることを知らない部下達の中では「副長は寡黙だ」「炎を操る魔獣と戦って喉を焼かれたのだ」と言われているそうだ。
着ていたプレートアーマーの兜を取った。

「え……」

「きっかけは父への反抗だ」

驚くのも無理はない。女であると教えたルーシュと騎士長以外は皆怒りをこらえるように顔を真っ赤にしていた。今目の前にいる彼らも例外ではない。

ちなみに今いる新人のほとんどを私が一度テストと言う名目でコテンパンにしている。女に負けたと知っては男のプライドとやらがズタズタにされるとアラーナが言っていた。

「副長は……女性だったのですか」

「そういうことだ。自分の上司が失望したか？」

「いえ！自分は副長をお守り通すことを再度誓います！」

絶句していたもう一人も頷いた。彼こそ寡黙と言うものであろう。

ともあれ、私が騎士として国の馬車に乗るとはな。

もうそろそろランマールに入るころだ。

2（前書き）

メイエの姿は書いたほうがいいのかなあ

2

「ようこそいらっしゃいました。奥に師団長がいらっしゃいますので、さあ」

よく喋る優男に連れられ師団長のいる部屋の前にいるのだが、

「……やはり気が引ける」

そういうことだ。あのエロジジイ達は私が女と知るや否や私を異様に、視線を隠す気もなくジロジロと見ていた。

ただの被害妄想ならばいいのだが、凌辱された気分だった。

今回会う師団長は私が初めて会う人達だ。あのエロジジイ達とは違うことを期待しよう。

「どうされました？」

この男まだいたのか。危く独り言を聞かれるところだった。

「いや、何もない」

「遠路はるばるよくいらっしゃった！さあ疲れたでしょう。あの席へ」

二人の師団長は商人のような笑みを浮かべながら円卓に私を促した。

「そのような鎧を着ていては疲れるでしょう。奥の部屋に服を用意させております」

「お構いなく。この後すぐに兵士達に会わなければならないので」

しかし、兜を脱がないわけにもいくまい。そもそも挨拶の時点で脱いでいないのは失礼だろう。

仕方ない。

「おお、女性とは伺っておりましたが、お美しい……」

世辞はうまいようだ。さすが師団長だ。

会食中は今回の魔獣討伐について、私が激励に周る場所等々を話した。

騎士の間では国軍の司令部は無能と言われているが、彼らは無能ではないと話の内容からわかる。

そもそも我が騎士団と国軍では役割が違う。

我々は魔獣討伐がほとんどだ。人を相手にするときは、聖戦のみである。

国軍は他の国軍を相手にすることがほとんどだ。

それがどうして国軍が今回魔獣討伐をするのかと言うと、魔獣がいる場所がこの国にとって大切な森だと言うのだから、聖女様は国軍に任せたそうだ。

「そろそろ時間です」

「そのようですな！このような美女と共に過ごせるとは。長生きしてよかった」

「また会える日を楽しみに待っていますぞ」

あまりジロジロとした視線を彼らから感じることはなかった。同じ師団長と言えど、人が変われば態度も変わるものだ。

周る場所は3か所だけでいいそうだ。
今回の討伐部隊には国軍の精鋭も含まれているそうで、彼らの剣を見ること。
一般兵士への激励。
とある部隊への激励。

とある部隊と言うのは非常に気になるが、非公式の部隊であり今回の作戦の要となるそうだ。
非公式の部隊が要となるのは違和感があるが、国軍たっての願いでこの作戦を行なっているのだ。このランマール草原の先、名誉の森

と呼ばれる深い森は国に関わる重要な場所なのだろう。非公式の部隊と言うのも頷ける。
そうと考えている間に訓練場に着いた。

案内役はまたもあの優男だ。

「ロードル騎士団副長様がお見えです！」

さすがは精鋭と言われる兵士達である。我が騎士団とも引けをとらないだろう。
彼らならば魔獣とて倒してくれる。

何か一言言わねばならないのだろうか。黙って剣を手入れする彼らに何と言えばいいのか……。

「副長様と手合せしたいものはいないか！」

この優男は何を言っているのだ。手合せだと？

「ちょっと待っ」

すでに精鋭の皆が私を囲んでいた。逃げ場なし……と言うわけか。
冷や汗が背中を濡らした。

「では、俺から行かせてもらう」

剣を構える彼からはまだ剣をあわせてすらないというのに圧を感じ

た。
彼の剣は一般的なロングソード。私が着ているプレートメイルにはあまり効果的でない武器だ。今回は練習だから、と言うわけだろう。対して私の剣は彼のロングソードより細い剣だ。レイピア。私が振り回せる剣と言えば、これくらいだ。小手に装着するバックラーと言う小盾は私の体をギリギリで守る最後の武器だ。

「うらあああ！」

真直ぐ突っ込んでくる。あのような体重の乗って剣を受けたら容易く吹き飛ばされるだろう。
避けると言う行為や盾で受ける行為は先読みしていたとしても、行動を起こすのはその時なのだ。
最初から盾を構えれば、相手は容易に盾をすり抜けて剣を降るだろうし、最初から避けようとすれば意識的に剣先をずらされて、当てられてしまう。

つまり、タイミングを間違えてしまうと負けると言うことだ。

「あぶ……」

避けたのはよかったが、彼は状態を崩すことなくすでに2段目を構えている。私の方が部が悪いようだ。

仕方なく剣で受けたのだが、体が一瞬浮いた気がした。
否、気がしたのではなく、少し浮いている。
馬鹿力とはまさにこのことだ。
一つ気付いたことがある。彼はもっと大きな剣の使い手であるようだ。ロングソードの扱いかたではないし、盾を持っていない。
ならば、彼が手を休めた今こそ攻め時だろう。相手の出方を見るよ

りも、先手を取るべきだ。

5手目で勝負は決まった。私の攻撃を受けきれなくなり、参ったと言ったのだ。

「さすがはあのロードル騎士団の副長殿だ。何かアドバイスをいただきたい」

これは困った。アドバイスなどしようものなら、声で女とバレてしまうではないか。

いや、どうしてバレてはいけないのか。

ルーシュにもああ言って出て来たのだから、もう気にするまい。

「戦いは常に先手を撃つべきだ。特にあなたは先手を取らなければ、いとも容易く倒されてしまうだろう。もっと攻めるべきだ」

彼は不思議そうな目をしながら頷いた。

「ご指導ありがとうございます」

握手をした後、兜をとって振り返らずに優男のもとへ歩いて行った。

一同絶句である。私の目の前の優男も驚いて何も言わない。あーだから嫌なのだ。

私が女で何が悪いのだ。

3（前書き）

文字数とかどのくらいがいいのでしょうか

3

「まさかロードルという無敗の騎士団の副長が女性とは思いもよりませんでした」

こんな何気ない言葉でさえ皮肉なのではないか？と思ってしまう。
やはり女であることがコンプレックスなのだ。
女が男に比べ非力であることを不条理と神を呪ったことさえある。
しかしそれは剣についてである。
教会の神官達に女では騎士は務まらないなどとたらたら言われたが、女だからと言われてもこれが私の使命なのだから何を言われても仕方の無いことだ。
故に女だからと言って騎士であることに違和感は、ない。

「私に神託が降りた。ただそれだけだ」

一般兵士のところに言って声をかけたり、魔獣についての予備知識

を教えたりと時間はあっという間に過去っていった。そもそも女であることを隠す必要など無いのだ。国軍の彼らと触れて、私の何かが消え去ったように思う。

「それにしても皆若い」

「今回の作戦は１４、１５師団の新兵が多く参加しております」

「この国にとって重要度の高い作戦とふんでいたのだがこの様子では違うようだな」

「……」

「言えないこと、か」

その後も優男が止めるまで兵士達に出来るだけのことを伝えた。戦場で最も死ぬのは新兵と相場は決まっている。だからこそ生き残ってもらいたい。

名誉の森に潜む魔獣は数が多く、個体はそれほど強くないと聞く。普通分母が大きければ分子もそれだけ大きいはずだが、あの森は勝手が違うらしい。

いつの間にやら目的地に着いたらしい。これは神殿だろうか、私が信託を受けた大神殿と変わらない大きさと凄みだ。

「この先にいる部隊は少々特殊な部隊です」

「どのように？」

「実際に見たほうがよろしいかと」

私は奥に進んだ。

目の前にあるカーテンのような布の先へ、また目の前にある扉の先へ。

「なんだここは」

石が組まれた浴場と言うだろうか、綺麗な水だ。私に一言言うと優男はすでにどこかに行ってしまった。

目の前には二人の生まれたままの姿の白い肌を晒した人がいる。

女性のようだがまだ若い。私の妹とそう変わらないだろう。

見惚れていると二人の内一人が私に気付いたようで、こちらに歩いてきた。

「あなたがロードル騎士団の方ですか？」

私に満面の笑みを向けるとそのまま私の答えを待っているようだ。

近くで見るとよくわかる。美しい。

「はい。ロードル騎士団副長、メイエであります」

「そうですか。さあこちらへ私はあなたのお話が聞きたいのです。

その鉄の鎧はここへお捨てください」

「は、はあ」

この世界には神の力と呼ばれるものがあるらしい。その神の力により鎧の重さはある程度軽減され、鎧の中の通気性は何もしていない鎧を着るよりも格段に良い。それでも私にとっては非常に重いし、

着慣れていないころは仲間から笑われたものだ。
兜と鎧を近くの石段に置いた。

「まあ！騎士の方ですから、男の方だと思っていました」

「珍しいでしょうか」

男と思っていたのに身体を隠すこともしなかったこの娘達はどういう神経をしているのだろうか。

「御神託を得られたのでしょう？あなたは騎士です」

「……」

「私もあなたのような強く、美しい女性になりたいです」

「あなた様は十分に美しく、人は如何様にも強くなれるものです」

「そうですか？あなたのように美しく、強くなれるでしょうか？」

「私など、美しくも強くもありません」

「謙遜なさるのですね」

「……」

この娘達は寒くないのだろうか。妹とも久しく会っていない。妹はもうそろそろ婚姻が決まる歳であろうし、この娘達もいづれ良き家に嫁いでいくのだろう。

「メイエ様、私はシラ。あっちで水を浴びているのはキユースです」

「シラ様とキス様はここで何をしているのですか？」

「身体を清めているのです」

「……何のために？」

「古きドラゴンを鎮めるためです」

3（後書き）

おらぁ！ドラゴンじゃあ！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3945ba/

メイエとドラゴンの剣

2012年1月12日00時46分発行